



アルコール依存症治療に携わる さまざまな職種とその役割

6

アルコール依存症治療における医師の役割と貢献

The role and contribution of doctors in the treatment of alcoholism



国立病院機構さいがた医療センター
院長/Sai-DATディレクター

佐久間 寛之
Hiroshi Sakuma

Summary

多職種連携が医療構造の基本となった今日、チーム医療のなかで医師に求められるものは変化している。依存症医療はパターン化が困難であるため、多職種による複数の視点のかかわりが必要である。治療チームには高い倫理観とヒューマニズムが求められる。医師はその牽引役、良心としてチームをまとめるべきである。同時に科学、医学の視点を忘れず、最新の知見を学び、現場にもち込む役割であることが望まれる。

依存症医療は感情疲労を起ししやすい。治療方針をめぐって摩擦が起きることもしばしばである。医師はチームマネージャーとして対立・分断を防ぎ、チームのパフォーマンスが向上するように動くべきである。チームでは忌憚のない意見をいい合えるよう、心理的安全性が担保される必要がある。安全で居心地のよいチームをつくるため、医師が率先してマネジメントを行えば他職種も納得しやすい。医学の徒として、また良心的なマネージャーとして治療チームの牽引役が望まれる。



Key Words

チーム医療、多職種連携、感情疲労、心理的安全性、チームマネジメント

はじめに

依存症治療における医師の役割とはいったい何であろうか。従来、たとえば昭和の時代であれば医師は医療の中心であり、司令塔であった。多職種連携という言葉はあっても、その在り方は現代とは大きく異なっていた。看護職やケースワーカー、心理職といった職種は医師の診断と治療方針の決定を受けて動く、医師の定めた治療方針の実行部隊であったように思う。現代の常識をもち出して過去の治療構造を論評したいわけではない。当時の医療世界はパターナリズムやヒエラ

ルキーなど、現代とは異なる複数の要因が背景となっていた。医療における意志決定も、現代よりもシンプルであったように思う。しかし今日、精神科診療はますます複雑になっており、医療現場にもち込まれる問題は複雑化している。そのため医師に求められる判断も、答えようのないものが大半である。依存症診療であればそれはなおさらだ。そのような場面では医師は一見冷静にみえても、冷や汗をかきながらアドリブで乗りきっているのである。

今日、時代は進歩した。多職種連携は分野を問わず医療構造の基本となった。多職種連携、チーム医療が